

2020年11月8日(日)

A会場

表彰委員会ミニシンポジウム | ライブ

【質疑応答・ディスカッション】地域高齢者の食支援
～まんのう町国民健康保険造田歯科診療所の取り組み～

座長:羽村 章(日本歯科大学生命歯学部高齢者歯科学)

14:40 ～ 14:50 A会場

[MSY2-OP] 挨拶

[MSY2-1] 地域の繋がりで進める食支援のかたち

○木村 年秀¹ (1. まんのう町国民健康保険造田歯科診療
所)

[MSY2-2] そうだ、皆でスーパーに行こう

○丸岡 三紗¹ (1. まんのう町国民健康保険造田歯科診療
所)

表彰委員会ミニシンポジウム|ライブ

【質疑応答・ディスカッション】地域高齢者の食支援 ～まんのう町国民健康保険造田歯科診療所の取り組み～

座長:羽村 章(日本歯科大学生命歯学部高齢者歯科学)

2020年11月8日(日) 14:40 ～ 14:50 A会場

【略歴】

1979年：

日本歯科大学歯学部（現 生命歯学部）卒業

1983年：

日本歯科大学歯学研究科大学院修了（歯科補綴学専攻）

1983年：

日本歯科大学歯学部 歯科補綴学教室第2講座 助手

1995年：

日本歯科大学附属病院 高齢者歯科診療科 助教授

2003年：

日本歯科大学附属病院 総合診療科 科長

2005年：

日本歯科大学附属病院 総合診療科・心療歯科診療センター教授

2008年：

日本歯科大学附属病院 病院長

2013年：

日本歯科大学生命歯学部 生命歯学部長（～2018年3月）

同 高齢者歯科学 教授 現在に至る

[MSY2-OP] 挨拶

[MSY2-1] 地域の繋がりで進める食支援のかたち

○木村 年秀¹（1. まんのう町国民健康保険造田歯科診療所）

[MSY2-2] そうだ、皆でスーパーに行こう

○丸岡 三紗¹（1. まんのう町国民健康保険造田歯科診療所）

(2020年11月8日(日) 14:40 ~ 14:50 A会場)

[MSY2-OP] 挨拶

(2020年11月8日(日) 14:40 ~ 14:50 A会場)

[MSY2-1] 地域の繋がりで進める食支援のかたち

○木村 年秀¹ (1. まんのう町国民健康保険造田歯科診療所)

【略歴】

1986年：

岡山大学歯学部 卒業

同年：

岡山大学歯学部 予防歯科学講座 助手

1991年：

島根県美都町国保歯科診療所 所長

1996年：

三豊総合病院 歯科保健センター 医長

2012年：

三豊総合病院企業団 歯科保健センター センター長

2015年：

まんのう町国民健康保険造田歯科診療所 所長

現在に至る

岡山大学歯学部 臨床教授

日本老年歯科医学会（専門医，指導医，代議員）

まんのう町琴南地区は人口2,183名、高齢化率48.2%（平成31年4月1日現在）と県内一、高齢化・過疎化が進んだ地域であり、まちそのものがフレイルに陥っていると言っても過言ではない。当地域の後期高齢者を対象とした「食べる楽しみ」に関する聞き取り調査を民生委員の皆さんにお願いしていたところ、仲良しの民生委員長が、「先生、歯が悪いのに足がなくて診療所に行けん人が多いみたいやで！」と教えてくださった。高齢者が移動手段を失うことにより、歯医者にも、買い物にも行けない、そして外出できなくなり孤立する。その結果、フレイル、低栄養となっていく…。どうも過疎地域の社会的問題が高齢者の低栄養の根本的な原因となっているようだ。分析結果では、体重減少に影響しているのは「口腔機能の低下」と「食べる楽しみの喪失」。食べる楽しみの喪失に最も影響する要因は「食材調達困難」であった。また、食事が楽しくない理由の回答で最も多かったのは「話し相手がいない」であり、移動手段の喪失に伴う孤立も低栄養に影響していた。高齢者が運転する車の事故が社会問題となっており、免許の自主返納が勧められているが、通院や買い物のための移動手段の確保は過疎地域の大きな課題である。しかし、通院、買い物、孤立の問題は医療の力だけでは太刀打ちできない。他分野と繋がって地域総働で解決に向けた取り組みが必要となる。

最近、プライマリ・ケアの分野では「社会的処方」が注目されている。社会的処方とは「社会との繋がり」を処方するということで、イギリスでは、孤独担当大臣という役職が創設されている。高齢化が進展するなか、フレイルへの対応が急務であるが、フレイルの特徴の一つは多面性であり、身体的フレイルに閉じこもりや孤独、うつなどの心理的、社会的フレイルが絡み合っている。フレイル・ドミノの起点は社会性の低下であり、これを解

決するための新しい処方箋が社会的処方なのかもしれない。世界で最も高齢化が進んでいる日本では、高齢化そのものよりも高齢者の孤立対策がより重要であり、医療専門職には、「繋がり」を必要とする患者を地域資源に繋げる、社会的処方の機能も期待されている。

本シンポジウムでは、当地区における医療介護の連携体制、高齢者の移動手段の確保対策や低栄養対策（診療所送迎サービス、配食サービス、買い物ツアー）など地域の繋がりで進める食支援の実践例を紹介する。

(2020年11月8日(日) 14:40 ~ 14:50 A会場)

[MSY2-2] そうだ、皆でスーパーに行こう

○丸岡 三紗¹（1. まんのう町国民健康保険造田歯科診療所）

【略歴】

2013年：

四国学院大学専門学校 歯科衛生科卒業

三豊総合病院企業団 歯科保健センター勤務

2015年：

まんのう町国民健康保険造田歯科診療所勤務

現在に至る

2019年：

徳島大学大学院総合科学教育部博士前期課程地域科学専攻地域創生分野修了

修士（学術）

日本老年歯科医学会認定歯科衛生士

「肉や魚を食べろと言われても、足がないけん手に入らんのじゃ！」

「独りぼっちで食事したって、なんちゃ美味しくない」

歯科診療所で出会うフレイルの住民たち。その原因は彼らを取り巻く"劣悪な社会環境"にあった。我々がいくら意識を変えようと指導しても、本人の努力だけではどうにもならない。

私が歯科医師とともに現在の歯科診療所に赴任したのは約5年前で、当初は医療介護の連携体制すらまったく構築されていなかった。そこで歯科医師の呼びかけにより「琴南の在宅医療介護の連絡会」を発足。一風変わった地域の仲間たちとともに、在宅医療介護の体制を何とか整備してきた。

一方で、肝心の介護予防についてはなかなかうまくいかなかった。どんなに健康教育に力を入れても関心を持ってくれるのはリテラシーの高い一部の層だけで、健康を目的としたアプローチはそもそも本当に予防が必要な住民には届かない。やはり買い物困難や孤食といった、フレイルの根本的な要因である"社会性"へのアプローチが不可欠だと感じた。

そこで我々とともに立ち上がったのは、一人の宅配お弁当屋さんだった。彼女の発案で60～80代の高齢者たちによる有償ボランティア組織「ことなみ未来食工房」を発足。メンバーはこれまでの人生で培ってきた自らの“得意”を活かしながら、配食見守りや歯科送迎など様々な活動に取り組んでいる。

現在では買い物難民を救うべく、住民ボランティアや医療介護専門職、県内一のYouTuberや地元のシンガーソン

グライター、スーパーマーケットなどと協働しながら、地域高齢者を月に一度バスでスーパーに連れていく“買い物ツアー”を実現している。

山奥ボツンと一人暮らしで、買い物に行けず寂しさから食欲を失っていた80代のYさん。歯科診療所の発信により、薬局、訪問リハ、民生委員、医師などが皆でしつこく説得し、ようやく宅配弁当の利用と買い物ツアーへの参加につながった。人との関わりが増えたことでみるみる元気を取り戻し、劇的にフレイルが改善した。

住民の暮らしも健康も医療の力だけでは守れない。専門職じゃない人たちとつながり合うことによって、努力せずとも誰もが結果として健康になれる社会がつくられる。普段から健康な住民と接している歯科がそこを牽引しなければ、一体他に誰がやるのだろうか？

分野や業種の壁を超えた"地域のつながり"こそが、きっとこれからの時代をよりよい方向に変えていくのだと信じている。